

OSAKA SEMBA ROTARY CLUB JAPAN

W E E K L Y R E P O R T

設立 昭和 63 年 (1988) 5 月 23 日
事務所 〒542-0086 大阪市中央区西心斎橋 1-5-12 心斎橋アーバンライフ907
TEL. (06) 6244 -1008 FAX. (06) 6244 -1010
WEB. http://sembarotary.club E-mail : semba@cocoa.ocn.ne.jp
例会 毎週月曜日・12 時 30 分・ホテル日航大阪 Tel. (06) 6244 -1111
会長 藤井 宏明 幹事 篠藤 敦子 会報広報委員長 中井 崇



四つのテスト／言行はこれに照してから I. 真実かどうか II. みんなに公平か III. 好意と友情を深めるか IV. みんなの為になるかどうか

第1602回 例会 2026年 (令和8年) 2月2日

(平和構築と紛争予防月間)

本日のプログラム

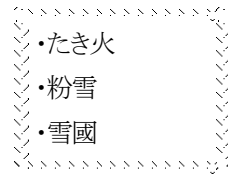
(本日のプログレス 原山 歩 副SAA)

- ロ-タリ-ソング 「君が代」「四つのテスト」
- 会長の時間 ○ 幹事報告 ○ 委員会報告 ○ ニコニコ箱報告 ○ 出席報告
- 2月お誕生月会員お祝い
- 卓 話 「生命保険業界のお話」 中嶋 啓至 会員
- 理事会 4階「藤の間」 13:40～14:40

前回 (1月26日) 例会記録

1. 来客紹介 三重 慶三 親睦委員

ゲスト: 0名 地区外: 1名 地区内: 0名 合計 1名



2. 会長の時間 藤井 宏明 会長



皆さま、こんにちは。

本日の会長の時間は、少し肩の力を抜いたお話をさせていただければと思います。

今月 27 日、私の会社では、日帰りではありますが、およそ 6 年ぶりに社員旅行を企画・実施する予定です。行き先は京都。午前中は清水寺、午後は天候次第ですが、保津川下りと嵐山散策、昼食は祇園の老舗の天ぷら店という、いわば“超定番コース”です。

社員旅行と聞くと、「今どきどうなんだろう」「若い人はどう感じるのだろうか」そんな声も聞こえてきそうです。

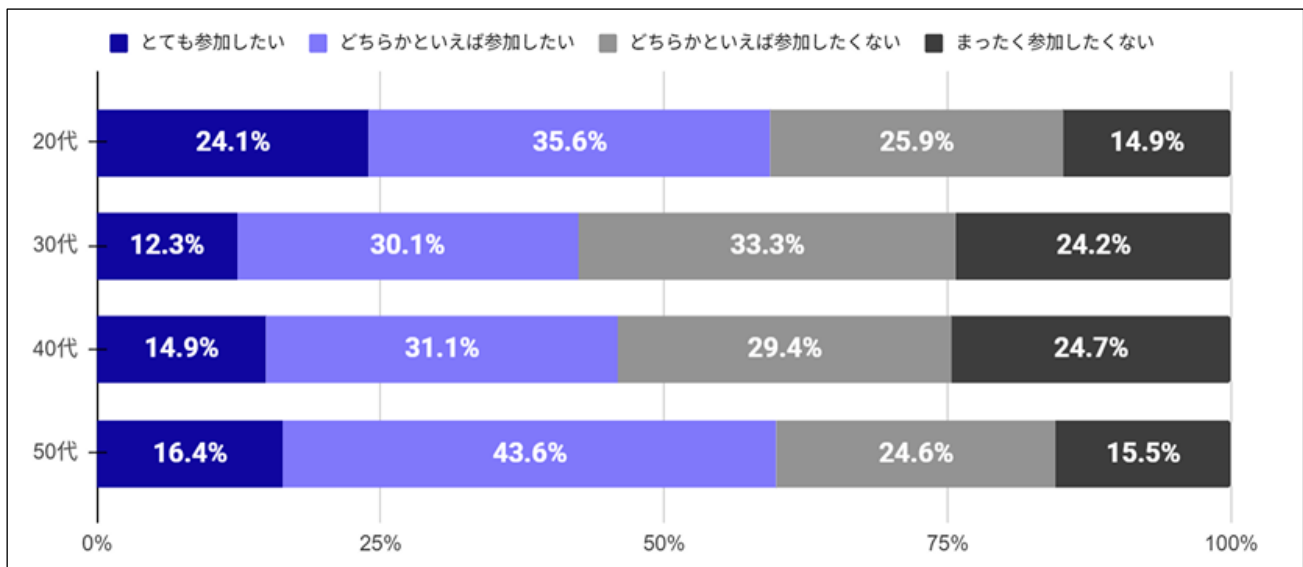
社員旅行のような、いわゆる「団体旅行」について、少しご紹介をしますと、日本の団体旅行の原点は、1905 年、明治 38 年に始まったと言われています。滋賀県草津市の南新助という方が実施されました。日本発の列車を利用した高野山や伊勢神宮への参拝団体旅行がその始まりで、1908 年国鉄臨時貸切列車を利用した善光寺参りの団体旅行が、日本の団体旅行の発祥といわれています。その会社が今の「日本旅行」です。

昭和の時代には、社員旅行は企業の一大イベントだったと聞きます。

全員が浴衣姿になり大広間で宴会あり、余興あり、上司の挨拶は基本長い、今振り返ると、少し懐かしく、少し照れくさい風景です。社員旅行に関するアンケートデータがありますので、少しご紹介します。

よいことのために手を取りあおう

UNITE FOR GOOD



時代が進み、働き方や価値観が大きく変わった今、社員旅行の意味も、当然変わってきていると思います。

そんな中で、今回あえて社員旅行を企画したのは、福利厚生を充実させたい、というよりも、組織として、同じ時間をどう共有するかを、改めて考えてみたかったからです。

経営をしていると、どうしても数字や効率、成果に目が向きます。それは当然で、必要なことでもあります。ただ、組織というのは、数字だけでは動かない部分を多く抱えているのも事実だと思います。

普段とは違う場所で、同じ景色を見て、同じ食事をし、他愛のない話をする。生産性で測れば、決して高い時間ではありませんが、人と人との関係性にとっては、案外、こうした時間が効いてくるものだと感じています。

これは、私たちロータリーの活動にも、どこか通じるものがあるように思います。

ロータリーも、短期的な成果を追いかける場ではなく、人との関係や信頼を、時間をかけて育てていく場です。

毎週例会に集まること自体が、実はとても贅沢で、意味のある仕組みなのかもしれません。

社員旅行も、ロータリーも、すぐに数字で結果が出るものではありません。けれど、後から振り返ったときに、「あの時間があったからこそ」と思える価値を、静かに積み重ねているのではないのでしょうか。

本日は、そんなことを感じながら、社員旅行という少し身近な話題を、皆さんと共有させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

3. ニュニコ報告

岡本茂 会員・・・本日、職業奉仕フォーラムです。良かったら聴いて帰って下さい。

中井 会員・・・本日の週報にシンガポール RC 訪問記事を寄稿させて頂きました。よろしければお読み下さい。

新川、小島、岡野、三重、高木、清水、平山、塩尻、藤井、岩崎、大島、山川、片岡、中西、井澤、洪、瀬島、原山、伊藤、林(英)、竹内、廣、井上、五味、大嶋、松村、篠藤、中村、岡本(真)、北野、澤田、

各会員・・・大相撲 大関安青錦 新関脇-新大関での89年ぶり連続優勝

4. ご挨拶 国際ロータリー第2500地区 釧路北ロータリークラブ 菊池 美恵子 様



釧路北 RC より菊池美恵子様がMUにお越しになりました。

ご挨拶のあと、バナー交換をされました。

5. 出席報告 洪 理恵 副SAA

会員総数 47名 出席率計算会員数 46名 出席会員数 42名(オンライン5名) 出席率 91%

第1598回(12月22日) 修正出席率 98%

6. クラブフォーラム 「職業奉仕委員会」 岡本 茂 委員長



ロータリークラブの職業奉仕は奉仕の原点であり、職業を通じて奉仕することです。一方で、職業奉仕の考え方は難しいといわれます。それは、社会奉仕は社会に、国際奉仕は世界に、青少年奉仕は青少年に奉仕することですが、職業奉仕は、明確な奉仕の対象があるわけではないからです。ロータリーには、二つの標語があります。

「He Profits most who serves best」(最もよく奉仕するもの、最もよく報いられる)と「Service above self」(超我の奉仕)です。この「service」について、発案者アーサー・シェルドンは、「価格、顧客への態度・気配り商品・業務に対する責任、顧客が感じる満足感、公平感、期待感これらすべてがサービスであり、サービスこそが、企業の永続発展と成功を保証する唯一の方法とっています。また、「Service above self」についても、自己を捨てては奉仕はできないので Service と self は同列一体、対等のものと考えます。これらのガイド役になるのが、四つのテスト(「それは真実か」「みんなに公平」「好意と友情を深めるか」「みんなのためになるかどうか)です。

ロータリーの奉仕の主体は、会員個人です。「I serve」です。職業奉仕は、「一人一業種で選ばれた職業人が毎週1回の例会に集い、例会を通じて奉仕の心を学び、その心を持ち帰って、今度は個人の立場でそれぞれの職場や地域社会で奉仕の実践に移すこと」です。しかし、「一人一業種」も「職業人」も時代と共に変化し、今、必ずしも「一人一業種」や「職業人」でなくてもよいものになってきています。職業人は、もはやロータリーにとっての重要な遺伝子ではないのです。これで職業奉仕ができるのでしょうか。ロータリーは大転換期にあります。ロータリーは高度な理想、ハイレベルな倫理観を求めます。誰でも簡単にできることではありません。それでもなお、奉仕の理想を求めるのがロータリーであり、難しいからこそ生涯をかける価値があります。

1990年代以降の『失われた30年』で、世界が成長する中、日本のGDPはアメリカに次ぐ2番手から今、ドイツにも抜かれ第4位、一人当たりGDPはG7中最下位です。この30年間、賃金は上がらず、ために購買力は低下し、豊かさの実感はありません。しかし、この30年間で副業・兼業、スポットバイト、フリーランスなど柔軟な多様な働き方が生まれ、または見直されて、その働き方は大きく変わりました。今、日本の人口は減少していますが、労働者人口は7000万人で増加しています。働く女性、定年後のシニアが増えているからですが、一人当たりの労働時間は確実に減少しています。深刻な人手不足といわれますが、人手はあります。企業は、いかに業務を分解し、超細切れにして、求職者のために時間と場所の選択肢を増やすことができるかにかかっています。

小グループ活動 E グループ 第二回レポート

日時：2026年1月28日(水)

前川 一成

会場：海家食堂

参会者：大嶋 澤田 中村 山川 原山 倉咲 井上 前川 【順不同・敬称略】

澤田さんの乾杯から始まりました第二回小グループ活動報告を天声人語風に報告します。

▶「敷居の高さ」の向こう側にあるもの：小グループ活動から見た、真の「繋がり」と「奉仕」のカタチ

「ロータリークラブ」という響きに、どのようなイメージを抱くだろうか。多くの人は、重厚な扉の向こう側で選ばれたエリートたちが交わり、どこか浮世離れした社交を想像するかもしれない。事実、最近入会されたメンバーからは「怖いイメージ」「敷居が高いイメージ」といった率直な声が漏れる。

しかし、その厚い扉を一枚めくってみれば、そこには形式的な儀礼を遥かに超えた、静かな熱量と人間味あふれる対話の世界が広がっている。現代のリーダーたちはなぜ、あえて多忙な日常を止めてまでこの場所に集うのか。ある日の小グループ会合で交わされた言葉から、現代におけるコミュニティの真価を紐解いてみたい。

▶垂直のピラミッドから、水平の広がりへ

ロータリークラブのステータス性は、時代とともに鮮やかな変遷を遂げている。30数年前、大丸の役員室に呼び出され「ちょっと用事がある」と入会を促された大嶋氏は、当時の圧倒的な「敷居の高さ」を鮮明に記憶している。

「僕が入った当時のロータリーは、正直、誰でも入れるようなクラブではなかった。会社を興してまだ3、4年目。自分にはまだそんな身分はないと、気後れしたのを覚えています」

かつての組織は、厳格な階級に基づく垂直的なピラミッド構造だった。しかし現代では、その重厚な歴史を土台にしつつ

も、より「水平な広がり」を持つ組織へと変化している。大きな会社の経営者から若手起業家まで、多様な背景を持つメンバーが混ざり合う。この多様性こそが、現代のロータリーに新たな息吹を与えている。

▶「断れない縁」が拓く、未知の扉

入会の動機を尋ねると、多くのメンバーが「尊敬する先輩からの逃げられない誘い」だったと苦笑する。「ノーとは言えない相手だった」と語る井上氏や前川氏、大嶋氏のエピソードに共通するのは、自らの意思を超えた「縁」の強制力だ。一見すると不自由な始まりに思えるが、この「断れない紹介」こそが、自分のコンフォートゾーンを突き破る強力な引力となる。自分一人では決して門を叩かなかったであろう世界に身を置くことで、異業種の知恵に触れ、リーダーとしての器を広げていく。「最初は怖かった」場所が、いつしか「自分をさらけ出せる居場所」へと昇華していくプロセスは、計算された合理性だけでは辿り着けない、人間関係の妙と言えるだろう。

▶なぜリーダーは昼間に会社を空けるのか——「奉仕」の論理

ビジネスパーソンにとって、月曜日の昼間に会社を空けることは容易ではない。「なぜこんなに忙しい時にわざわざ集まるのか」という従業員からの視線に、リーダーはどう答えるべきか。ここに、ロータリーの核心である「親睦と奉仕の両輪」という思想が深く関わっている。単なる親睦、つまり「飲み会」であれば、夜に集まれば十分だ。しかし、ロータリーがあえて日中の貴重な時間を割くのは、それが「奉仕」を目的とした活動だからである。

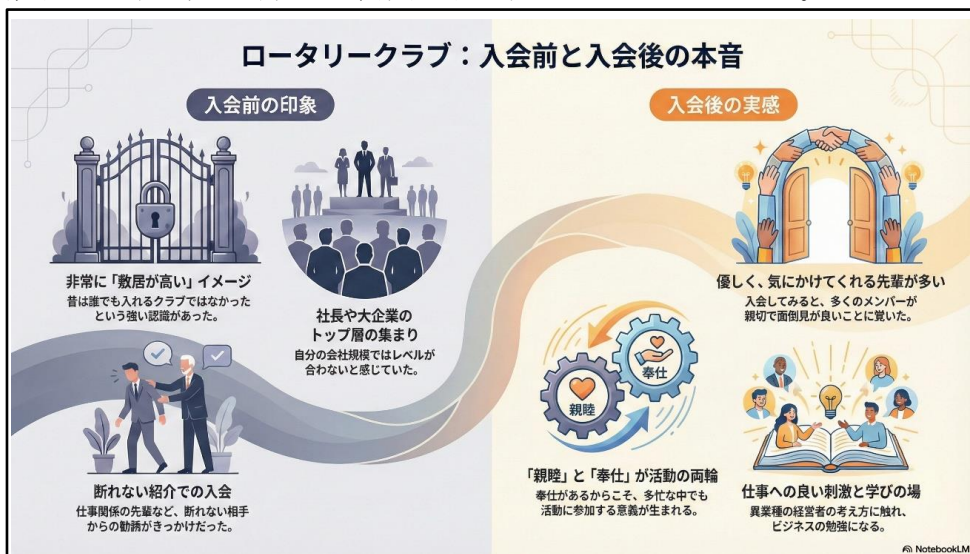
ここで重要なのは、単に寄付金を出すことではない。現場に赴き、汗を流して地域社会のために動く。

その「後ろ姿」を従業員に見せることが、組織全体の品格と誠実さを証明する。リーダーが自ら汗をかき、社会に貢献する姿を知っているからこそ、従業員もまた「行ってらっしゃい」と笑顔で送り出すことができる。この「心のロジック」こそが、忙しい昼間に集うことの真の正当性なのだ。

▶私たちは何のために集うのか？

ロータリークラブという場所は、かつての厳格な階級社会の断片を残しながらも、現在は「個人の顔が見える関係」を構築するためのプラットフォームへと進化を遂げている。小グループでの対話を通じて、メンバーは単なる「社長」や「役職者」から解放され、一人の人間として繋がっていく。効率性と生産性が優先される現代において、あえて手間をかけ、汗を流し、互いの価値観をさらけ出す。一見「無駄」に見える様な中にこそ、私たちが本当に求めている「繋がり」の本質が隠されているのではないのか。

あなたが、あえて多忙な日常を止めてまで守りたい「繋がり」は何ですか？その答えは、効率性という定規では測れない、敷居の向こう側にあるのかもしれない。



挿絵作成：
前川が操作した NotebookLM

☆次回2月9日(月)例会予定

- ・職奉卓話 大島会員 松村会員
- ・40周年委員会 4階「藤の間」 13:40～
- ・新入会員歓迎会「桃園園」 18:00～